

## 小学生のスポーツ実施率向上を目指して

同志社大学 スポーツビジネス B

○丸山 弘貴 高濱 聡一郎 野村 帆乃果 吉原 毅

### 1. 緒言

近年、子どもの体力・運動能力の二極化が進んでいる。昔のような、かくれんぼや鬼ごっこなど身体を動かす機会が大きく減少し、その代わりに電子ゲームや習い事をする時代になった。それにより、運動機能が低下している。また、子どもに与えられる学校の体育の時間といっても週に 2.3 時間程度である。これではあまりに少なく、多くの子どもが運動不足に陥っている。（※文部科学省 子ども体力の現状と将来への影響）

その一方で、スポーツ少年団や民間スポーツクラブに入り、日常的にスポーツを行う、身体機能の高い子どもがいる。運動不足の子どもとこうした子どものギャップは大きく、二極化が進む一方である。

このようなギャップを埋めるためにも、時間・空間・仲間の「三間」の充実が必要である。特に、私たちは「空間」という点を重要視し、スポーツと触れ合う環境がないことが関係しているのではないかと考えた。多種目のスポーツを体感できる場を設け、実施してもらうことで、スポーツの楽しさを知ってもらい、スポーツ活動の習慣化に繋げる。そこで、私たちは、具体的なスポーツ実施率向上策について提案していく。

### 2. SPSS 解析・結果

笹川スポーツ財団「子どもスポーツライフデータ 2015 年」を用い、解析を行った。

(1) 運動部に所属している人と入っていない人が年間スポーツ実施頻度に関係するのかを調べ、以下の結果から有意な差を確認できた。

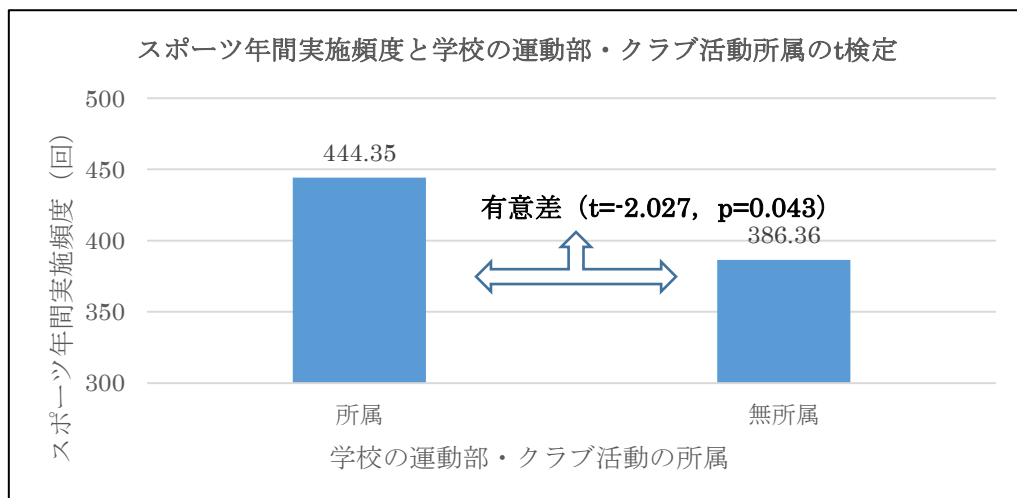


図 1 スポーツ年間実施頻度と学校の運動部・クラブ活動所属の t 検定

(2) 運動が「好き」、「どちらかという好き」、「どちらかという嫌い」、「嫌い」の4つのグループに分けた時、運動が「好き」の回答が近づくほど、年間スポーツ実施頻度が高いことが以下の結果から確認できた。

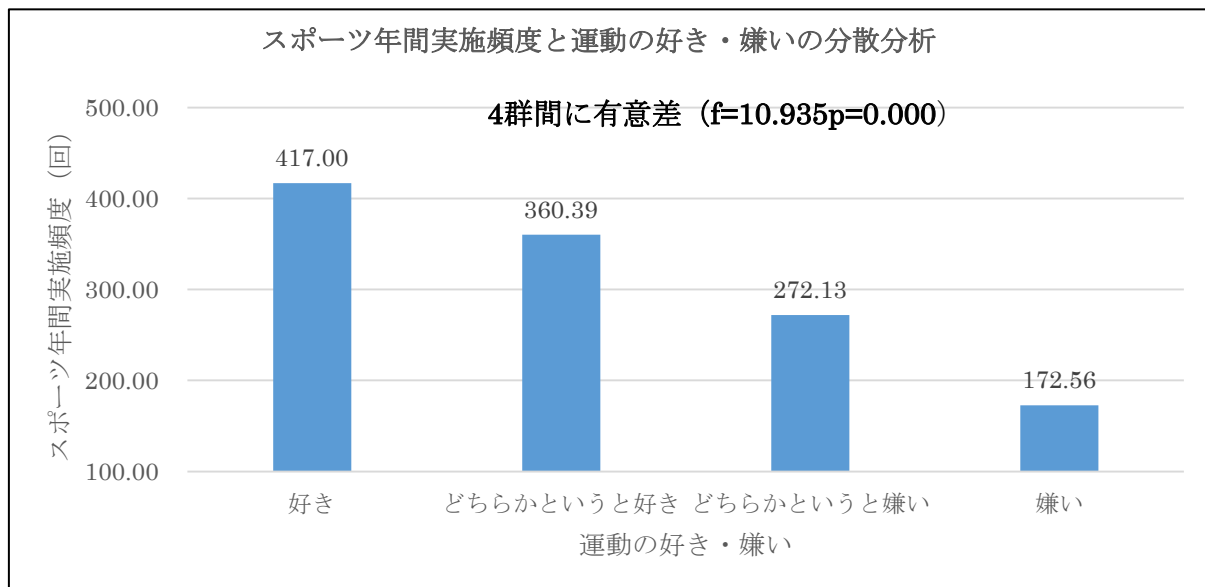


図2 スポーツ年間実施頻度と運動の好き・嫌いの分散分析

これらの解析から、運動を「好き」「楽しい」と感じさせることがスポーツ実施率向上に繋がっていくと考えた。

### 3. 提言

運動嫌いの子供たちが、スポーツを「楽しい」と思い、自分たちから進んで自発的にプレーできるような環境を提供する。

(1) 学校の授業の1コマを利用して、スポーツを行う。

小学4年生、5年生、6年生を対象にした授業の1コマを利用して、週に1回自分たちで選択したスポーツを行う。3ヶ月ごとに選択スポーツを変えていき、1年で計4種類のスポーツを体験することが出来るようにする。サッカーや野球、バスケットボールなどのメジャースポーツだけでなく、ラグビーや陸上ホッケーなどのマイナースポーツも経験できる選択肢に入れることで、自分に向いている、楽しいと思えるようなスポーツに出会える可能性を増やすことが出来る考える。

(2) 「日本アスリート銀行」の設置

上記の環境を整えるに当たっての具体的な案として、「日本アスリート銀行」という機関を設置するものとする。これはスポーツ庁管轄の機関として機能するものであり、その内容は、各地の希望する小学校にアスリートやライセンスを持った指導者が赴き子供たちに指導を行うというものである。

まず、スポーツ庁の直属の管理下に「日本アスリート銀行」を設置する。そして、その下に支部として、日本をブロックごとに分けた8つの支部を作り、各県の各市の教育委員会に管理を行わせ、希望の小学校に、元アスリートや指導者を派遣するものである。

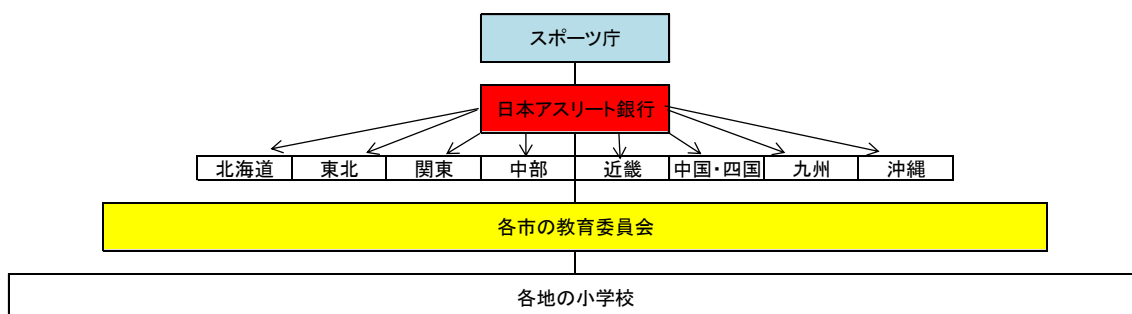


図3 「日本アスリート銀行」の仕組みの略図

元アスリートや指導者は、「日本アスリート銀行」のシステムに登録しておき、自身の居住状況や専門種目と、同じく「日本アスリート銀行」に登録していた小学校との希望が一致すれば契約となり、そこから1年間は同じ小学校に指導を行う。小学校は、希望する種目を数種目登録しておき、条件の合う4種目を専門とする指導者と1年間の契約を結ぶ。そして次の1年ではまた異なった種目で契約を結ぶ。各種目には最低3人の指導者を準備し、学年ごとに分けて指導を行う。

例として、ある小学校でサッカー、陸上ホッケー、テニス、ラグビーがこのシステムにしたがって行われるとする。そして、それぞれの種目でサッカーにはA1、A2、A3さんが、陸上ホッケーにはB1、B2、B3さん、テニスにはC1、C2、C3さん、ラグビーにはD1、D2、D3さんが指導者として派遣されたとする。サッカーのA1さんは初めての1ヶ月間4年生のサッカーを選択した子供に指導を行う。A2さんは5年生、A3さんは6年生を担当する。そして1ヶ月が経つとA1さんは5年生の指導を、A2さんは6年生、A3さんは4年生の指導を行い、最後の1ヶ月は残りの学年の指導を行う。他の種目も同様に代わる代わる違う学年の子供たちを1人の指導者が行う。4、5、6年生それぞれのこの体験授業の時間割が水、木、金曜日であるとするなら、A1さんの勤務は初めての1ヶ月が水曜、次の1ヶ月が木曜、最後の1ヶ月が金曜となる。

このシステムのメリットとして、学校（子供たち）側としては1ヶ月ごとに違う指導者の下でスポーツを行うことで違った考えや新たな楽しみを見つけられることが挙げられ、指導者側としては、年齢が異なり様々な傾向のある子供たちを担当することでコーチングスキルの向上や新たな刺激を受けることが出来ることが挙げられる。

一方、問題点として挙げられるのが、1つの小学校で12人もの指導者と1年間の契約をしないといけないことやマイナースポーツから各学校に3人派遣できるほどの指導者があつまるかということ、さらには3人の異なった指導者に指導してもらうことで

子供たちの中でそのスポーツに対する考えが混乱してしまう恐れがあるということである。ローテーションで指導者を回すためにはそれなりの人数も必要で、さらにはそれらの人を雇う資金もどこから捻出するのかという点も問題点の1つである。

#### 4. まとめ

3の提言から、4年生から6年生までの3年間で、子供たちは様々な異なるスポーツを異なる指導者のもとでプレーすることで、自分にあった「楽しい」、「続けたい」と思えるようなスポーツに出会うことが出来る可能性を増やす環境を作ることが出来ると思う。

しかしその政策の中で、指導者の賃金問題や指導者を十分に派遣でき、管理できるかという問題点も浮上してきた。実際にこのシステムを運営するためには、それらの問題点を解決する方法をこれから模索していく必要があると考える。

#### <参考文献>

- ・文部科学省 子どもの体力の現状と将来への影響

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm)

- ・笹川スポーツ財団 子どものスポーツライフデータ 2015年